

玉里文庫本『古筆源氏物語』「若菜下」巻・第八一〜一二〇丁の翻刻と考察

武藤 那賀子 ・ 富澤 萌未

はじめに

鹿児島大学附属図書館が所蔵する玉里文庫本の古筆源氏物語^一は、鎌倉時代から南北朝時代に書写されたものと考えられている、全一五帖（「空蟬」「花宴」「賢木」「須磨」「閑屋」「絵合」「松風」「玉鬘」「初音」「野分」「藤裏葉」「若菜下」「夕霧」「匂宮」「紅梅」）の取り合わせ本である。当該本については、徳光澄雄が書誌および本文の傾向を調査し^二、伊藤鉄也が画像をサイトに掲載している^三。しかし、徳光論の書誌に疑問点があったため、拙稿二本において書誌情報を再調査した^四。

本稿では、古筆源氏物語の「若菜下」巻を取り上げる。当該本は、徳満論および拙稿において他の巻と寸法が違うことが確認できており、元々は他の帖とは別の揃であった可能性が高い。また、多くの丁において、墨が乾ききる前に丁を閉じたために起きたと考えられる文字写りが生じているという特徴がある。このような当該帖を、以下、八一から一二〇丁の翻刻を行った上で^五定家本の大島本と比較し、異なる箇所が他のどの本文に近いのかを見ていく^六。その過程で、特異な本文があった場合には考察を加えた。

翻刻と考察

【凡例】

一 改行箇所や和歌の書式は原本のままとし、丁数とその表裏、行数を付記した。なお、丁数の下の括弧内には画像のコマ数および画面の左右の表記、および『源氏物語大成』^七のページ数・行数を示した。

一 原本に用いられている変体仮名は、すべて現行の平仮名に統一した。ただし、原本の平仮名中に片仮名を混用した箇所は、片仮名を平仮名に改めた。

一 ミセケチは、現状では文字に二本線を引いている。このため翻刻では、ミセケチを、取り消し線で示した。

一 傍記は、該当する文字の横にそのまま示した。

一 補入記号のない補入は一一で示し、補入記号のある補入はへで示した。

一 各丁の翻刻の後に載せた異同は、当該本と一致するものがある場合にはその諸本を漢字一字で示した。このとき、定家本系、

キーワード…玉里文庫本、古筆源氏物語、若菜下、書誌学

河内本系、別本全てが一致する場合には、それぞれ^①河内^②河内とのみ示した^③。定家本系、河内本系の中の何本かが一致する場合には、それぞれの系統の文字を示した後に一致する諸本を漢字一字で示す。なお、別本に属する諸本はこの限りではない。また、一致するものがない場合には「ナシ」とし、近い本文があった場合、その本文を「参考」に掲げた。

【翻刻】

八二丁オモテ(画三四六左)(大一一七〇〜一一七二)

- 1 して人ひとりの御けはひなり
- 2 けりとみゆ女御の君もわたり給て
- 3 もろともにみたてまつりあつか
- 4 ひ給ふたゝにもをはしまさて物
- 5 のけなど^①おそろしきをはやくま
- 6 いら給ねとくるしき御心ちにも
- 7 きこへ給わか宮のいとうつくしうて
- 8 おはしますをみたてまつり給
- 9 ても^②いみしうなき給ておとなひ

①ナシ 「参考」諸本「いとおそろしき」

②定陽肖三 「参考」他諸本「いみしく」

八二丁ウラ(画三四七右)(大一一七一)

- 1 給はむを^①みたてまつらすなりな

- 2 むことわすれ給なむかしとの給えは
- 3 女御せきあえすかなしとおほした
- 4 りゆ、しくかくなのおほしそさり
- 5 ともけしうはものし給はし心
- 6 によりなむ人はともかくもあるを
- 7 きてひろきうつはものにはさい
- 8 わいもそれにしたかひせはき心あ
- 9 る人はさるへきにて^②ことなりて

①河宮 「参考」他諸本「えみたてまつらす」

②ナシ 「参考」諸本「たかきみと」

諸本は「高き身となりても」としており、身分の話にしているが、玉里文庫本は、「異なりても」と、他の人とは異なっているとも解釈できる。このことから、諸本の解釈と大きな差はないといえる。

八二丁オモテ(画三四七左)(大一一七二)

- 1 もゆたかにゆるえるかたはをくれき
- 2 うなる人は^①な^②か^③きためしなむお
- 3 ほかりけるなど仏神にもこの御心は
- 4 せのありかたくつみかるき^④ありさ
- 5 まを申あきらめさせ給御すほ
- 6 うのあさりたちよるなにも
- 7 ちかくさふらふかきりのやむことなき
- 8 ^⑤僧なとはいと^⑥かうおほしまとえる御

9 けはひをきくにいと^⑤いみしければ

①ナシ

〔参考〕**定陽**「ひさしくつねならす心ぬるくなか らかなる人はな
かき」、**河御宮尾大鳳**「ひさしくつねからす心ぬるくなたら
かなる人はなかき」、他諸本「ひさしくつねならす心ぬるく
なたらかなる人はなかき」

他諸本と比較すると、大きな本文の抜けがある。しかし、これは目
移りによるものではないといえる。また、他諸本では、「きうなる人」
が長くその地位にいることはできず、「心ぬるくなか/たらかなる人」
は長命であるとする。これに対し、玉里文庫本は、「きうなる人」は
「なき」としている。また、補入記号を入れて解釈すると「なかき」
となる。前者ならば、「きうなる人」は世間から見捨てられてしまふ
という例が多いと解釈できる。しかし、後者では、他諸本と真逆の意
味になってしまう。

②ナシ 〔参考〕**別阿**「事そのさま」、他諸本「さま」

③**定横池陽肖三河**

〔参考〕**定禰**「僧などは」**別阿**ナシ、他諸本「僧なども」

④**定陽肖** 〔参考〕他諸本「かく」

⑤ナシ

〔参考〕**別阿**「いみしく」、他諸本「いみしくこころくるしければ」

八二丁ウラ (画三四八右) (大一一七二)

1 心をこしていのりきこゆすこし

2 よろしきさまにみえ給時五六日う

3 ちませつ、またおもりわつらひ給

4 事いつとなくて月日を^①へ給えは

5 猶いかにおはすへきにかよかるまし

6 き御心ちにやとおほしなげく御物、

7 けなといひていてくる^②にもなし

8 なやみ給さまそこはかとみえすた

9 たひにそえてよはり給ふさまに

①ナシ

〔参考〕**定禰**「へたまは^結」、他諸本「へ給は」

②ナシ 〔参考〕**別阿**「こと」、他諸本ナシ

「いひいてくるにもなし」の「に」は連体形「いてくる」に続いて
いることから、助詞の「に」と解釈した。この場合、「機会・状況」
を表すことになるため、文意に問題はない。

八三丁オモテ (画三四八左) (大一一七二～一一七二)

1 のみみゆれはいともくかなしくいみ

2 しくおほすに御心のいとまも

3 なけなりまことや衛門督は中納言

4 になりにかかしまの御よには

5 いとしたしくおほされていと、きの

6 人なり身のおほえまさるにつけ

7 ても思事のかなはぬうれはし

- 8 さを^①おもひてこの宮の御あねの
9 二宮をなむえたてまつりてける

①ナシ 「参考」諸本「おもひわひて」

八三丁ウラ(画三四九右)(大一一七二)

- 1 下らうのかうゐはらにおはしまし
2 ければ心やすきかたましりて
3 おもひきこへ給えり人からもなへて
4 の人におもひなすらふればけはひ
5 こよなくおはすれともとよりし
6 みにしかたこそ猶ふか、りけれ
7 なへてのおはすてにて人めにとか^①
8 めらるましきはかりにもてな
9 しきこえ給えり猶かのしたの心

①ナシ 「参考」諸本「なくさめかたき」

諸本は「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」(古今・雑上・読人しらず)を引用した表現になっている。しかし、玉里文庫本ではそうではなく、「一般的な姨捨」「全ての姨捨」と解釈できる。いずれにせよ、柏木が落葉宮を「姨捨」のような気持ちでありながらも北の方として扱っていると解釈できよう。

八四丁オモテ(画三四九左)(大一一七二)

- 1 わすれぬ小侍従といふかたらひ人は^①
2 宮のこし、うのめのとのむすめな^②
3 りそのめのとのあねそ^③このかむ
4 の君の御めとなりければはや
5 くよりけちかくき、たてまつり
6 てまた宮をさなくおはしまし、
7 ときよりいときよらになむおはし
8 ます御門のかしつき^④にたてまつ
9 り給さまなとき、をきたてまつ

①定陽肖

「参考」定横池河「わすれす」定禰「わすへら」別阿「忘れはて給はて」他諸本「わすられす」

②ナシ

「参考」定肖「宮の(御)し、うのめのとのむすめなりけり」、河大「宮のし、うのめのとのむすめなりけり」、河鳳「宮のこし、うのめのとのむすめなりけり」、別阿「宮の御めのとのむすめなりけり」、他諸本「宮の御し、うのめのとのむすめなりけり」

柏木の「かたらひ人」である小侍従の紹介の箇所である。諸本では、「宮の侍従」という乳母の娘であるとするが、玉里文庫本では、「宮の小侍従」という乳母の娘が「小侍従」であるとする。あるいは、玉里文庫本は「宮の御」の「侍従」という乳母の娘が「小侍従」であると読める。「小侍従」と漢字表記した直後に「こし、う」と表記する

のは些か不審である。

③ 定陽 「参考」 定横榊 阿大ナシ、他諸本「かの」

④ ナシ 「参考」 阿阿「聞え」、諸本ナシ

この「に」は体現「かしづき」に続いていることから、助詞の「に」と解釈した。この場合、「機会・状況」を表すことになるため、文意に問題はない。

八四丁ウラ (画三五〇右) (大一一七二〜一一七三)

1 りて^①かゝるおもひつきそめ給はる

2 なりけりかくて院もはなれ^②おは

3 します人めすくなくしめやか

4 ならむををしはかりて^③小侍従

5 むかへとりつ、^④いみしくかたらふむ

6 かしよりかくいのちもたふまし

7 くおもふ事をかゝるしたしきよす

8 かありて御ありさまを^⑤もきつた

9 へたえぬ心のほとをもきこしめさ

① ナシ

「参考」 定横陽「かゝるおもひつきそめたるなりけり」、定三「かゝるおもひもつきそめたるなり」、他諸本「かゝるおもひもつきそめたるなりけり」

玉里文庫本のみ、「給はる」という敬語表現がある。これは、中世以降の用法で、補助動詞用法「てくれる」の尊敬語である^九。このこ

とから、この箇所に関しては、玉里文庫本は、柏木に対しての敬意表現があると見える。

② ナシ

「参考」 阿阿「おはしまいたる」、他諸本「おはしますほと」

③ ナシ 「参考」 諸本「小侍従を」

④ 定横池 「参考」 他諸本「いみしう」

⑤ ナシ 「参考」 諸本ナシ

八五丁オモテ (画三五〇左) (大一一七三)

1 せて^①たのもしきにさらにその

2 するしのなれば^②いみしうなむ

3 つらき院の^③御うゑたにかくあま

4 たにかけくしくて人におされ給

5 やうにてひとり^④おほとこのもれる

6 よなくおほくつれくにてすくし

7 たまふなりなと人のそうしける

8 ついてにもすこしくおほした

9 る御けしきにておなしくはた、

① ナシ 「参考」 諸本ナシ

② 定陽 「参考」 他諸本「いみしく」

③ ナシ 「参考」 諸本ナシ

他諸本にはない院への敬意表現が、玉里文庫本にある。

④ 定横池

〔参考〕阿「御とのこもり」、他諸本「おほとこのこもる」

八五丁ウラ (画三五二右) (大一一七三)

- 1 人の心やすきうしろみをさため
- 2 むにはまめやかにつかうまつるへ
- 3 き人をこそさたむへかりけれど
- 4 給はせて^①女二の宮なかくうしろ
- 5 やすくゆくすゑなかきさまにて
- 6 ものし給なる事との給はせけ
- 7 るをつたえき、しにいとをし
- 8 くもくちをしくもいか、おもひみ
- 9 たる、けにおなし^②御すちには

①ナシ 〔参考〕諸本「女二の宮の」

②ナシ

〔参考〕池「御すちへと」は、定陽「御すちと」、阿「すち」、

他諸本「御すちとは」

八六丁オモテ (画三五二左) (大一一七三)

- 1 たつねきこえしかと^①それとこそお
- 2 ほゆるわさなりけれとうちうめき
- 3 給えは^②あなおほけなそれをそれ
- 4 とさしをきたてまつり給てま

5 たいかやうにかきりなき御心なら

6 むといえはうちほゝゑみてさこそは

7 ありけれ宮にかたし*〔け〕なくきこえ

8 させおよひけるさまは院にも内に

9 もきこしめしけりなとてかはさ

①定横 〔参考〕他諸本「それはそれとこそ」

②定陽

〔参考〕他諸本「こし、ういてあなおほけな」

*補入された「け」の右下に何かしらの文字があるが、判読不能。一〇

八六丁ウラ (画三五二右) (大一一七三) 一一七四

- 1 てもさふらはさらましとなむこと
- 2 のついでにはの給はせけるいて
- 3 やた、いますこしの御いたはりあら
- 4 ましかはなといえはいとかたき御こと
- 5 なりや御すくせとかいふ事侍るな
- 6 るをもとにてかの院の^①事いて、
- 7 ねむころにきこえ^②給はむに^③たち
- 8 なからひさまたけきこへさせ給へ
- 9 き御身のおほえとやおほされし

①定横榊池陽三河御宮尾平大鳳国

〔参考〕他諸本「事に」

② 定横 神池陽肖三 阿阿

〔参考〕別保「給らむに」、他諸本「給ふに」

③ ナシ

〔参考〕定横「たちなからひ」、他諸本「たちならひ」

小侍従の台詞である。諸本のように「たちならび」だと、柏木が源氏に対して同等に齒向かう様となる。一方で、「玉里文庫本」では、力の差はわからないものの、邪魔立てをし、その期間が長いことを示す。

八七丁オモテ (画三五二左) (大一一七四)

- 1 このころこそすこしものくしく御
- 2 その色もふかくなり給えれといへは
- 3 いふかひなくはやりかなるくちは
- 4 さにえいひはて給はていまはよし
- 5 すきにしかたをはきこへしやた、
- 6 かくありかたきもの、ひまにけち
- 7 かき程にてこのころのうちににおも
- 8 ふことのはしすこしきこへさせ
- 9 つへくたはかり給へ^①いとおほけなき

① 定陽

〔参考〕定横「おほやけなき」、定池「おほやけなき」、他諸本「おほけなき」

八七丁ウラ (画三五三右) (大一一七四)

- 1 心はすへてよしみ給え^①おそろし
- 2 ければおもひはなれて侍りとの
- 3 給へはこれよりおほけなき心は
- 4 いか、はあらむいとむくつけき事を
- 5 もおほしよりけるかな^②なしに
- 6 まいりつらむとはちふくいてあな
- 7 き、にくあまりこちたくものを
- 8 こそいひなし給へけれよはいと
- 9 さためなきものを女御きささき

① 定陽

〔参考〕阿阿「さらにおそろしければ」、他諸本「いとおそろしければ」

② ナシ

〔参考〕阿阿「何に」他諸本「なにしに」
諸本のように「なにしに」であれば、小侍従が、「何をしに私はこちらに参上したのでしょうか」となる。しかし、玉里文庫本の「なしに」であった場合は、「何も用事がないのに私はこちらに参上したのでしょうか」となるため、意味に大きな違いはない。

八八丁オモテ (画三五三左) (大一一七四)

- 1 もあるやうありてものし給た
- 2 くひなくやはましてその御あり
- 3 さまよおもへはいとたくひなくめ

- 4 てたけれとうちくは心やましき
- 5 こともおほかるらむ院のあまたの
- 6 御中にまたならひなきやうになら
- 7 はしきこえ給ひしにさしもひと
- 8 しからぬきはの御方く^①にたち
- 9 ましりめさましけなる^①事とも、

①ナシ 「参考」諸本「事も」

八八丁ウラ (画三五四右) (大一一七四〜一一七五)

- 1 ありぬへくこそいとよき、侍一りや
- 2 ^①世中いとつねなきものをひとときはに
- 3 おもひさためてはしたなく^②ふつ
- 4 きりなることなの給そよとの給へ
- 5 は人におとされ給える御ありさまと
- 6 てめてたきかたにあらため給へき
- 7 にやは侍らむこれはよのつねの御
- 8 ありさまにも侍らさむめりた、
- 9 御うしろみなくて^③た、よはして

①ナシ 「参考」^①別阿「世中も」、他諸本「世中は」
^②別阿

「参考」^①定大「つききり」、「^①定横「つききり、へりく」、「^①定池「つききり」、
 他諸本「つききり」

③ナシ 「参考」諸本「た、よはしく」
 諸本「た、よはしく」は、不安定な状態を示す形容詞であるのに対
 し、玉里文庫本は、不安定な状態にする動詞である。

八九丁オモテ (画三五四左) (大一一七五)

- 1 をはしまさむよりはをやさまに
- 2 とゆつりきこえ給ひしかはかたみ
- 3 に^①こそおもひかはしきこへさせ
- 4 給ためれあいなき御をとしめ
- 5 ことになむとはてくははらたつを
- 6 よろつにいひ^②こしらへまこととはさは
- 7 かりよになき御ありさまをみた
- 8 てまつりなれたまえる御心に数
- 9 にもあらずあやしきなれすかたを

①ナシ 「参考」諸本「さこそ」

②ナシ 「参考」諸本「こしらへて」

八九丁ウラ (画三五五右) (大一一七五)

- 1 うちとけて御らむせられむとは
- 2 さらにおもひかけぬ事なりた、
- 3 ひとことものこしにてきこへしらす
- 4 はかりはなにはかりの御身のや

- 5 つれに^①かあらむ^②神仏にもおもふこと
- 6 申すはつみあるわさかはといみ
- 7 しきちか事をしつゝの給へは
- 8 しはしこそ^③あるましきことに
- 9 いひかへしけれものふかゝらぬわか

①定禰 「参考」他諸本「かは」

②定禰陽肖三 「参考」他諸本「仏神」

③ナシ 「参考」諸本「いとあるましき」

九〇丁オモテ (画三五五左) (六一一七五)

- 1 人はひとのかく身にかへていみしく
- 2 おもひの給を^①えいひはてゝさりぬ
- 3 へきひまあらはたはかり侍らむ
- 4 院のをはしまさぬよは御ちやうの
- 5 めくりに入おほくさふらひてお
- 6 ましのほりにさるへき人かなら
- 7 すさふらひ給へはいかなるをりを
- 8 ^②かひまをみつ^③侍らむと^④わひて
- 9 まいりぬいかにくゝとひゝにせめられ

①ナシ

「参考」定禰池「えいなひはてゝもし」、他諸本「えいなひはてゝも

し」

②河七

「参考」定三「おりかは」、別保「をりかは」別阿「おりをか」、他諸本「かは」

③河

「参考」定池「へからむ」、定肖「侍外からむ」、別阿「はひまきる、ひまとはし侍らんといひつゝ」、他諸本「侍へるへからむ」

④定陽 「参考」他諸本「わひつゝ、」

九〇丁ウラ (画三五六右) (六一一七五～二一七六)

- 1 こうしてさるへきをりうかゝひ
- 2 つけてせうそこをしておこせた
- 3 りよろこひながら^①いみしうやつれ
- 4 しのひておはしぬまことに^②もわか
- 5 心にも^③けしからぬ事なればけ
- 6 ちかくなかくおもひみたるゝ事も
- 7 まさるへきことまで^④もおもひも
- 8 よらすたゝいとほのかに御そのつ
- 9 まはかりをみたてまつりし

①定禰 「参考」別阿ナシ、他諸本「いみしく」

②定陽 「参考」他諸本ナシ

③別阿 「参考」他諸本「いとけしからぬ」

④ナシ 「参考」定禰ナシ、他諸本「は」

九二丁オモテ (画三五五六左) (大一一七六)

- 1 春の^①ゆふへあかすよと、もにおもひ
- 2 いてられ給ふ御ありさまをすこ
- 3 しけちかくてみたてまつり
- 4 おもふ事をもきこへしらせては
- 5 ひとくたり^②を^③やみせ給あはれとや
- 6 おほししるとそおもひける四月
- 7 十よひはかりの事なりみそき
- 8 あすとてさい院にたてまつり給
- 9 ^④を女房十二人ことに上らうにはあら

①定陽 「参考」他諸本「ゆふへの」

②ナシ

「参考」定陽「の御かへりも」、定禰池「の御返なども」、河国「の御かへしなとも」、他諸本「の御かへりなとも」*阿阿は、全く違う本文。

③なし 「参考」諸本ナシ

玉里文庫本は、「を」を入れることによつて、その前後の本文を繋いでいる。このような特徴はこれまでも散見された。

九二丁ウラ (画三五五七右) (大一一七六)

- 1 ぬわかき人わらはへなとおのかし、
- 2 ものぬひ^①けさうしつ、ものみむ
- 3 と^②おもふにまうくるもとりにい

4 とまなけにて御まえのかた^③しめやか

- 5 に人しけからぬおりなりけり
- 6 ちかくさふらふ按察の君も時く
- 7 かよふ源中将せめてよひいたさ
- 8 せければおりたるまにた、この
- 9 侍従はかりちかくはさふらふなりけり

①定陽阿阿

「参考」定禰池「けさうしなと」、他諸本「けさうなと」

②ナシ

「参考」定禰池「おもひまうくるへもく」、河「おもひまうくる」、阿阿「おもひまうくるに」、他諸本「おもひまうくるも」

③定陽

「参考」定池「しめやかにせ」、他諸本「しめやかにて」

九二丁オモテ (画三五五七左) (大一一七六、一一七七)

- 1 よきをりとおもひてやおら^①御す
- 2 のひむかしおもてのをましのは
- 3 しにすえつさまでもあるへきこ
- 4 となりやは^②宮なに心もなくおほ
- 5 とのこもりにけるをちかくおとこの
- 6 けはひすれは院のをはすと
- 7 おほしたるにうちかしこまり
- 8 たるけしきみせてゆかのしも

9 にいたきおろしたてまつる

①ナシ 「参考」 諸本「み帳」

諸本では、小侍従が柏木を女三の宮の「御帳台」の東側、すなわち母屋の中に据えたとなつてゐる。それに対し、玉里文庫本は、柏木の位置を「御簾」の東側、すなわち簀子としてゐる。

②ナシ 「参考」 諸本「宮は」

③定種河

「参考」 剛阿「けはひしければ」、他諸本「けはひのすれは」

九二丁ウラ (画三五八右) (大一一七七)

- 1 にもにおそはるゝかとせめてみ
 - 2 あげ給えればあらぬ人なりけり
 - 3 あやしき、もしらぬ事ともを
 - 4 そきこゆるやあさましくむくつ
 - 5 けくなりて人めせとちかくもさ
 - 6 ふらはねはき、つけてまいるも
 - 7 なしわなゝき給さま水のやうに
 - 8 ^①あせはなかれてものもおほえ給は
 - 9 ぬけしきいとあはれにらうたけ
- ①ナシ 「参考」 河「あせ」、他諸本「あせも」

九三丁オモテ (画三五八左) (大一一七七)

- 1 なりか奉申すならねといとかうおほ
- 2 しめさるへき身とはおもひ給
- 3 えられすなむむかしよりおほけ
- 4 なき心の侍りしをひたふるにこ
- 5 めてやみ侍りなましかは心の
- 6 うちにくたしてすきぬへかりける
- 7 をなか／＼もらしきこへさせて院に
- 8 もきこしめされにしをこよなく
- 9 もてはなれてもの給はせさりける

九三丁ウラ (画三五九右) (大一一七七)

- 1 にたのみをかけそめ侍りて身の
 - 2 かすならぬひときはに人よりふかき
 - 3 ^①御心さしをむなしくなし侍りぬ
 - 4 る事とうこかし侍にし心なむよ
 - 5 ろついまはかひなき事とおもひ
 - 6 給へかえせといかはかりしみ^②侍り
 - 7 けるにか年月にそえてくちをし
 - 8 くもつらくも^③むくつ^④けく^④あはれ
 - 9 にいろ／＼にふかくおもひ給へまさる
- ①ナシ
- 「参考」 剛「心ざしをも」、他諸本「心ざしを」

諸本の「心さし」の場合、柏木は、身分の低さを理由に、他の人よりも深い女三の宮への気持ちが無駄にしてしまったとなる。一方、玉里文庫本の「御心さし」の場合、柏木が自分自身の心ざしに敬語表現をつけるはずはないと判断できることから、この「御心さし」は朱雀院であるといえる。つまり、柏木は、自分自身の身分の低さを理由に、朱雀院からの格別な要請（女三の宮の婿になるようにとのもの。ただし、事実無根）を無駄にしてしまったと述べている。この箇所は、玉里文庫本の本文が最も齟齬が生じないものとなっている。

②ナシ 「参考」 諸本「侍りにける」

③ナシ

④ナシ 「参考」 定禰「むつけくも」 阿「むくつけくも」

⑤ナシ 「参考」 阿「あはれにもぞ」、他諸本「あはれにも」

九四丁オモテ (画三五九左) (大一一七七〜二七八)

- 1 にせきかねてかくおほけなきさま
- 2 を御らむせられぬるもかつはいと思
- 3 やりなくはつかしければつみお
- 4 もき心もさらに^①侍らましといひ
- 5 もてゆくにこの人なりけりとおほ
- 6 すにいとめさましくおそろし
- 7 くてつゆいらえもし給はすいとこと
- 8 はりなれとよにためしなき
- 9 事にも侍らぬをめつらかになきけ

①ナシ 「参考」 諸本「侍るまし」

諸本では、「侍るまし」であることから、柏木が、「大それた罪を犯そうとする気持はこれ以上さらさらございませぬ」となる。しかし、玉里文庫本では、「侍らまし」と反実仮想の意となるため、「大それた罪を犯そうとする気持はこれ以上ございませぬ」となる。玉里文庫本の本文の柏木は、諸本の柏木よりも、かなり強引な人物造形であるといえる。

九四丁ウラ (画三六〇右) (大一一七八)

- 1 なき御心はへならは^①なか／＼ひたふる
- 2 ^②なる心もこそつき侍れあはれと
- 3 たにの給はせはそれを^③うけ給て
- 4 まかてなむとよろつにきこへ給よ
- 5 そのおもひやりはいつくしくもの
- 6 なれてみえたてまつらむ^④もはつ
- 7 かしくをしはかられ給にた、かは
- 8 かりおもひつめ^⑤なるかたはしきこ
- 9 えしらせてなか／＼かけ／＼しきこ

①ナシ 「参考」 諸本「いと心うくてなか／＼」

②定横禰池陽肖三阿阿 「参考」 他諸本ナシ

③ナシ 「参考」 諸本「うけたまはりて」

④定横禰池陽肖三阿阿 「参考」 他諸本「ことも」

⑤ナシ 「参考」 諸本「たる」

諸本では「おもひつむ」という動詞の連用形に完了の助動詞「たる」が付いた形だが、玉里文庫本は「おもひつめ」という名詞に「なる」という断定の助動詞が付いた形である。

九五丁オモテ (画三六〇左) (大一一七八)

- 1 とはなくてやみなむとおもひしかと
- 2 いとさはかりけたかうはつかしけに
- 3 はあらてなつかしくらうたけに
- 4 やはくとのみみえ給ふ御けはひの
- 5 あてに^①いみしうおほゆることそ人
- 6 に、させ給はさりけるさかしく思
- 7 しつむる心もうせていつちもくゝあ
- 8 てかくしたてまつりてわか身
- 9 もよにふるさまならすあとたへて

①ナシ 「参考」諸本「いみしく」

九五丁ウラ (画三六一右) (大一一七八)

- 1 やみなはやとまておもひみたれぬた
- 2 たいさ、かまとろむともなき夢に
- 3 このてならし、ねこのいとらうた
- 4 けにうちなきて^①きたるこの宮に
- 5 たてまつらむとて我ゐてきたる

- 6 とおほしきをなににしに^②やたて
- 7 まつりつらむとおもふ程におとろき
- 8 ていかにみえつるならむとおもふ宮は
- 9 いと^③あさましうつ、ともおほえ給

①ナシ 「参考」諸本「きたるを」

②ナシ 「参考」諸本ナシ

③定陽肖 「参考」他諸本「あさましく」

九六丁オモテ (画三六一左) (大一一七八～一二七九)

- 1 はぬにむねふたかりて^①おほしほる、
- 2 をなをかくのかれぬ御すくせの
- 3 あさからさりけるとおもほし^②な
- 4 みつからの心なからも^③うつ、心には
- 5 あらすなむおほえ侍かのおほえな
- 6 りし御すのつまをねこのつな
- 7 ひきたりしゆふへの事もきこへ
- 8 いたりけにさはたありけむよ
- 9 とくちをしくちきり心うき御身

①ナシ

「参考」^①定横池陽^②御七宮尾平鳳国「おほしおほる、を」、^③定首^④大「おほさる、を」、^⑤別阿「くたくを」、他諸本「おほしをほほる、を」

玉里文庫本は「思し惚るる」となっており、「ぼんやりする」「放心する」の意となっている。それに対し、「おほしおほるゝ」の場合は、「思し潮るる」と解釈できることから、考え込む意味になる。「おほしをほほるゝ」は「思しおほほるる」であり、「正気もなくていらっしやる」と解釈される^{二三}。諸本の異同を見る限りでは、玉里文庫本の本文が最も納得のできる本文となっている。

②ナシ

〔参考〕 岡阿「なさせたまへ」、他諸本「なせ」

③ナシ 〔参考〕 諸本「うつし心」

九六丁ウラ (画三六二右) (大一一七九)

- 1 なりけり院にもいまはいかてかは
- 2 みたてまつらむと^①かなしう心ほそ
- 3 くていとをさなけになき給をいと
- 4 かたしけなくあはれとみたてま
- 5 つりて人の御なみたをさへのこう
- 6 袖はいと、つゆけさのみまさるあけ
- 7 ゆくけしきなるにいてむかたなく
- 8 なかくなり^③いかし侍へきいみし
- 9 くにくませ給へはまたきこへさせむ

①河鳳

〔参考〕 岡阿「えみえ給らしと」、他諸本「みえた てまつらむ」

②ナシ 〔参考〕 諸本「かなしく」

③ 岡保 〔参考〕 他諸本「いかゝは」

九七丁オモチ (画三六二左) (大一一七九)

- 1 事もありかたきをたゝひとこと
- 2 御こゑをきかせ給へとよろつにきこ
- 3 えなやますもうるさくわひしく
- 4 て^①ものもさらにいはれ給はねははてく
- 5 はむくつけくこそなり侍りぬれ
- 6 またかゝるやうはあらしと^②いとをし
- 7 とおもひきこへてさらはふような
- 8 めり身をいたつらにやはなしは
- 9 てぬいとすてかたきによりてこそ

①ナシ 〔参考〕 諸本「ものの」

②ナシ 〔参考〕 諸本「いとうし」

諸本では、柏木が「いと憂し」、すなわちとても辛いと感じている。それに対し、玉里文庫本は「いとをし」とあり、これは、柏木自身が置かれている望ましくない状況についての辛さを示しているといえる。^{二三}

九七丁ウラ (画三六三右) (大一一七九、一一八〇)

- 1 かくまでも侍れこよひにかきり
- 2 侍りなむいみしくなむつゆにて

- 3 も御心ゆるし給さま^①ならはそれ
- 4 にかへつるにてもすて侍りなまし
- 5 とてかきいたきていつるにはては
- 6 いかにしつるそとあきれておほ
- 7 さるすみのまの屏風を^②ひきあけて
- 8 ^③とをしあけたれはわたとの、みな
- 9 みのとのよへ入しかまた^④あけなから

①定横神池陽肖三河阿 「参考」他諸本「などは」

②ナシ 「参考」諸本「ひきひろけて」

③定横 「参考」他諸本「とを、しあけたれは」

④阿 「参考」他諸本「あきなから」

九八丁オモテ (画三六三左) (大一一八〇)

- 1 あるにまたあけくれの程なるへし
- 2 ^①ほのかに^②みたてまつらむの心あれ
- 3 はかうしをやをらひきあけてか
- 4 ういとつらき御心にうつし心もう
- 5 せ侍ぬすこしおもひのとめよとを
- 6 ほされはあはれとたにのたまは
- 7 せよとをしきこゆるをいとめつらかな
- 8 りとおほしてものもいはむと^③給へ
- 9 とわな、かれていとわかしくしき御さ

①定横神池陽肖三河平国

「参考」阿「ほのかにても」他諸本「ほのかにも」

②定横神池陽肖三河阿

「参考」他諸本「おほせと」

九八丁ウラ (画三六四右) (大一一八〇)

- 1 まなりた、あけにあげゆくにいと
- 2 心あはた、しくてあはれなる
- 3 夢かたりもきこへさすへきをかく
- 4 にくませ給へはこそさりともいま
- 5 おほしあはすることも侍りなむ
- 6 とてのとかならすたちいつるあけ
- 7 くれ秋のそらよりも心つくしなり
- 8 おきてへゆくそらもしられぬあけくれに
- 9 いくつかの露のかゝる袖なり

九九丁オモテ (画三六四左) (大一一八〇)

- 1 ^①ひきいて、うれなきこゆれはいて
- 2 なむとするにすこしなくさめ給て
- 3 あけくれのそらにうき身はきえな、む
- 4 ゆめなりけりとみてもやむへく
- 5 とはかなけにの給ふ^②こゑわかくをか
- 6 しけなるをき、さすやうにて

- 7 いてぬるたましぬはまことに身を
- 8 はなれてとまりぬる心ちす女官の
- 9 御もとにもまうて給はておほと

①定陽 「参考」他諸本「とひきいて、」
 ②ナシ 「参考」阿「こゑなど」他諸本「こゑの」

九九丁ウラ (画三六五右) (大一一八〇〜一一八一)

- 1 えそしのひておはしぬるうちふし
- 2 たれとめもあはすみつる夢の
- 3 さたかにはあはむこともかたきをさえ
- 4 おもふにかのねこのありさま
- 5 いとこひしくおもひいてらるさて
- 6 もいみしきあやまちしつる身か
- 7 なよにあらむ事こそまはゆく
- 8 なりぬれとおそろしくそらはつ
- 9 かしき心ちしてありきなども

一〇〇丁オモテ (画三六五左) (大一一八二)

- 1 し給はす女の^①ためはさらにも
- 2 いはすわか心ちにもいとあるまし
- 3 き事といふ中にもむくつけくお
- 4 ほゆれはおもひのまゝにもえまき

- 5 れありかす御門の御めをもとり
- 6 あやまちて事のきこえあらむに
- 7 かはり^②おほえむことゆへは身のいた
- 8 つらにならむ^③くるしく^④おほし
- 9 しかいちしるきつみには^⑤あら

①ナシ

「参考」定横阿保「御ためには」定池「御ためには」河国「御」阿「御ため」他諸本「御ためは」

②ナシ 「参考」諸本「かはかり」

諸本は「かはかり」となっており、玉里文庫本は「かはり」となっている。「かはり」は、鎌倉時代中期頃から、「代償」の意味で使用されるようになってることから^{一四}、読みに大きな差は出ないものと判断できる。

③定横榊陽肖三河

「参考」定池「くるしかるましく」、他諸本「くるしくも」

④ナシ

「参考」定横「おほゆましきか」定池「おほゆ^{まじ}か」他諸本「おほゆまししか」

この箇所は、句点を入れるか否かという違いが諸本間である箇所である。玉里文庫本の場合は、「思ししが」ではなく、「思し、しか」と切るべきであろう。ただし、その場合であっても、諸本とは真逆の意味になる。すなわち、柏木は、「身のいたづらになる」状況を苦しく思っているという解釈になる。その場合、「身のいたづら」のみならず、源氏に睨まれること(一〇〇丁ウラの内容)も双方ともに辛いと

思っているということになるため、従来の柏木像とは少々変わって
るのではないか。

⑤別

「参考」**定**榊「あたらすと」、**定**陽「あたらす」、**定**三「あへた」ら
すとも、他諸本「あたらすとも」

一〇〇丁ウラ (画三六六右) (大一一八二)

- 1 すともこの院にめをそはめられ
- 2 たてまつらむ事はいとおそろし
- 3 くはつかしくおほゆかきりなき
- 4 女ときこゆれとすこしよつきたる
- 5 心はへましり^①うへはゆえ^②ありとこめ
- 6 かしきにもしたかはぬしたの
- 7 心そひたるこそとある事かゝるこ
- 8 とにうちなひき心かはし給ふた
- 9 くひもありけれこれはふかき

①別

「参考」**定**大「うへは^①へは」、**定**横池陽貞三「うへは」、他諸本「う
へは」

②ナシ 「参考」諸本「あり」

一〇二丁オモテ (画三六六左) (大一一八一～一一八二)

- 1 心もおはせねとひたおもむきにも
- 2 をちし給える御心にたゝいましも
- 3 人の^①きゝつけたらむやうにまはゆく
- 4 はつかしくおほさるればあかき
- 5 所にたにえいさりいて給はず^②いと
- 6 くちをしき身なりけりとみつか
- 7 らおほししるへしなやまし
- 8 けになむとありければおとゝき、給
- 9 ていみし^③き御心をつくし給ふ御

①**定**横 他諸本「みき、」

②ナシ 「参考」諸本ナシ

③**定**陽 「参考」他諸本「いみしく」

一〇二丁ウラ (画三六七右) (大一一八二)

- 1 ことにうちそえてまたいかにとおと
- 2 ろかせ給てわたり給えりそこはか
- 3 とくるしけなる事もみえ給はず
- 4 いたいたくはちらひしめりて^①さ
- 5 はやかにもみあはせたてまつり
- 6 給はぬを^②ひさしくなりぬるた
- 7 えまを^③うらめしうおほすにや
- 8 といとをしくてかの御心ちのさま

9 なときこえ給ていまはのとちめ

①ナシ

〔参考〕定陽「さやかにも」、他諸本「さやかにも」

②定横榊池陽首三

〔参考〕河御「いとひさしくなりぬるをいとひさしくなりぬる」、他

諸本「いとひさしく」

③定陽首

〔参考〕別阿「うらめしと」、他諸本「うらめしく」

一〇二丁オモテ (画三六七左) (大一一八二)

1 にもこそあれいまさらに^①おろかな

2 るへきさまをみえをかれしとて

3 なむいはけなかりし程よりあつ

4 かひそめてみはなちかたければ

5 かう月ころよろつをしらぬ^②御さま

6 にすくし^③侍るおのつからこの程す

7 きはみなをし給てむなときこへ

8 給かくけしきもしり給はぬも

9 いとをしく^④心くるしうおほされ

①ナシ 〔参考〕諸本「をろかなるさまを」

玉里文庫本の本文は、諸本にはない「べき」という言葉が入っている。このことによる、大きな解釈の差は生まれないが、玉里文庫本は

仮定の話をしているという違いが生じている。

②ナシ 〔参考〕諸本「さま」

③定陽

〔参考〕定横榊三河「侍そ」、定池「侍そ」、別保「はへるそ」、別阿

「侍なり」、他諸本「侍にこそ」

④定横

〔参考〕定池「心くるしう」、他諸本「心くるしく」

一〇二丁ウラ (画三六八右) (大一一八二)

1 て宮は人しれすなみたくましく

2 おほさるかむの君はましてなかく

3 なる心ちのみまさりておきふし

4 あかしくらしわひ給まつりの

5 ひなとはものみにあらずひゆくき

6 むたちかきつれきていひそゝのか

7 せとなやましけにもてなして

8 なかめふしたまえり女宮をはかし

9 こまりをきたるさまにもてな

一〇三丁オモテ (画三六八左) (大一一八二〜一一八三)

1 しきこへておさくうちとけても

2 みえたてまつり給はすわかかたに

3 はなれるて^①つれく^②に心ほそくなか

- 4 める給えるに^②わらへ^①のもたるあふひ
- 5 を^③みて
- 6 くやしくそつみをかしけるあふひ草
- 7 神のふるせるかさしなれとも^④
- 8 とおもふも^⑤なかく^⑥なり世中しつか
- 9 ならぬ車のおとなとをよその事に

①ナシ 「参考」 「いとつれく」

②^①河御宮尾平国 「参考」 他諸本「わらはへ」

③^②定禰 「参考」 他諸本「みたまひて」

④ナシ

「参考」^①河横 「神のゆるせるかたしならぬに」、^②河池 「神のゆるせるかたしならぬに」 他諸本「神のゆるせるかたしならぬに」

玉里文庫本の「ふるす」は、「旧す／古す」という字が宛てられよう。「ふるす」には、「古くする。使つて古くさせる。」という意味と、「飽きて見捨てる。忘れる。」という意味がある^{一五〇}。この「神」は、賀茂の神と光源氏の双方を指すという注釈がある^{一六〇}ことから、源氏が女三の宮に飽きてしまつていれば柏木は問題がないものと解釈していることになる。

⑤ナシ

「参考」^③河三 「いと、なかく^④なり」、^④河阿 「中く^⑤なれとひとやり

ならぬなくさめに」、他諸本「いと中く^⑥なり」

- 一〇三丁ウラ (画三六九右) (大一一八三)
- 1 きゝてひとやりならぬつれく^①にくら
- 2 しかたくおほゆ女宮もかゝるけ
- 3 しきのすさまじけさも^②みしり
- 4 給えは何事とはしり給はねと
- 5 はつかしくめさましきにも
- 6 おもはしくそおほされける女房
- 7 なども物みにみないて、人すくな
- 8 にのとやかなれはうちなかめて
- 9 さうのことなつかしくひきまさくり

①ナシ

「参考」^③河阿 「をのつからしり」、他諸本「みしられ」

- 一〇四丁オモテ (画三六九左) (大一一八三)
- 1 ておはするけはひもさすかに
- 2 あてになまめかしけれとおなし
- 3 くはいまひときは^④およはさりける
- 4 るすくせよと猶おほゆ
- 5 もろかつらおち葉をなに、ひろひけむ
- 6 なはむつまじきかさしなれとも
- 7 とかきすさひるたるいとなめけなる
- 8 するしりう事なりかしおと、の
- 9 君はまれく^⑤わたり給てえふとも

*一〇四丁ウラの七行目の「三」が写るか。

一〇四丁ウラ (画三七〇右) (大一一八三〜一一八四)

- 1 たちかえり給はずしつ心なくお
- 2 ほさるゝにたえ入給ひぬとて人ま
- 3 いたりたればさらに何事もおほし
- 4 わかれす御心もくれてわたり給^①道
- 5 の程心もとなきにけにかの院はほと
- 6 りのおほちまで人たちさはきた
- 7 りとのゝうちなきのゝしるけは
- 8 ひいとまかゝし我にもあらていり
- 9 給えれば日ころはいさゝかひまみへ

①定池「道程」、河「みちの程」

「参考」定横「みちのほとも」、別保「みちのほとも」、他諸本「み

ちの程の「

一〇五丁オモテ (画三七〇左) (大一一八四)

- 1 たまひつるをにはかになむかく
- 2 おはしますとてさふらふ^②かきり
- 3 はわれもおくれたてまつらしと
- 4 まどふさまともかきりなし御すほ
- 5 うとものため^③ほち^④僧ともさるへ

- 6 きかきりこそ^④まかてぬもあれほ
- 7 ろゝとさはくをみ給にさらはかき
- 8 りにこそはと^⑤おほしはつる^⑥あさ
- 9 ましさ何事かはたくひあらむ

①河御宮尾平大鳳国

「参考」河七「給るを」、他諸本「たまへるを」

②定横神池陽肖三河別保 「参考」「かきり」

③別 「参考」他諸本「そうなども」

④ナシ 「参考」他諸本「まかてね」

⑤定横神池陽肖三河

「参考」他諸本「おほしはへる」

⑥ナシ 「参考」他諸本「あさましさに」

一〇五丁ウラ (画三七二右) (大一一八四)

- 1 さりともものゝけのするにこそあ
- 2 らめいと^①かうひたふるになさはき
- 3 そとしつめ給ていよゝいみし
- 4 き^②願をたてそえさせ給ふすく
- 5 れたるけむさとものかきりめし
- 6 あへつゝめてかきりある御いのちにて
- 7 この世つき給ひぬともたゝいまし
- 8 はしのとめ給へ^③不動のちかひあ
- 9 りその日かすをたにかけとゝめ

① 定陽肖 「参考」他諸本「かく」

② ナシ 「参考」他諸本「願どもを」

③ ナシ

「参考」 阿「不動尊のものとちかひ」、他諸本「不動尊の御本のちかひ」

一〇六丁オモテ(画三七七左)(大一一八四)

- 1 たてまつり給へとかしらより^①く
- 2 ろけむりをたて、いみしき心を
- 3 おこしてかちしたてまつる院
- 4 もた、いまひとたひめをみあはせ
- 5 給へいとあえなくかきりなりつらむ
- 6 程をたに^②みすなりにける事の
- 7 ^③くやしうかなしき^④をおほしま
- 8 とへるさまとまり給へきにもあら
- 9 ぬをみたてまつる心ちともた、

① ナシ

「参考」 定横「ことにくろけむり」、定池「へま^くことにくろけむり」、

他諸本「まことにくろけむり」

② 阿 「参考」 阿大「もみす」、他諸本「えみす」

③ ナシ 「参考」他諸本「くやしく」

④ ナシ 「参考」 阿保「など」、他諸本「をと」

一〇六丁ウラ(画三七七右)(大一一八四、一一八五)

- 1 おしはかるへしいみしき御心の
- 2 中を佛もみたてまつり給にや
- 3 月ころさらにあらはれ^①いてぬもの、
- 4 けちめさきわらはにうつりて
- 5 よはひの、しるほとにやうくいきい
- 6 て給に^②うれしくもおほし^③さはく
- 7 かいみしくてうせられて^④人みなさ
- 8 りぬ院ひと、ころの御み、にきこえ
- 9 むをのれを月ころてうしわひさ

① ナシ

「参考」 阿保「いてえぬ」、他諸本「いてこぬ」

② ナシ

「参考」 定三「うれしくもゆ、しくへも」、定編「うれしうもゆ、しくも」、阿「うれしきもゆ、しく」、他諸本「うれしくもゆ、しくも」

③ ナシ 「参考」他諸本「さはかる」

玉里文庫本には「うれしくも」のみで「ゆ、しくも」がない。一見すると、「うれしくも」の「も」があるために、「ゆ、しくも」を書き忘れたかのように見える。しかし、その後の本文が「思し騒ぐが」と諸本とは違い、句点ではなく読点で次文に繋がっていることから、この「も」が入ったと考えられよう。これらのことから、玉里文庫本では、光源氏は紫の上が息を吹き返して嬉しいという気持ちになり、騒ぐものの、そこから物の怪の語りが始まるという解釈ができる。

④ナシ

〔参考〕**定池**「人はみなさりぬ」、他諸本「人はみなさりね」

一〇七丁オモテ (画三七七二左) (大一一八五)

- 1 せ給かなさけなくつらければお
- 2 なしくはおほししらせむとおもひ
- 3 つれとさすかにいのちもたふまし
- 4 く身をくたきておほしまとふを
- 5 みたてまつれはいまこそかくいみ
- 6 しき身をうけたれいにしへの
- 7 心の、こりてこそかくまでもまい
- 8 りきたるなればもの、^①くるしさを
- 9 を、^②もへみすくさてついにあらはれ

①ナシ

〔参考〕**定陽**「心くるしきをも」、**阿大**「心くるしき」、**阿阿**「心くるしきも」、他諸本「心くるしさを」

②ナシ 〔参考〕他諸本「え」

この箇所は不審である。かつての心が残っているからこそ、物の怪となつた六条御息所は光源氏の前に参上したとある。参上したがゆえに、「ものの苦しさを思へ」と述べ、見過ごすことができずに姿までも現してしまったと言う。「参り来たる」といった謙讓語を使用している中で、「思へ」という敬語のない命令形が誰に向けてのものなのかが不明である。しかし、諸本が「心苦しき」としている本文を「苦

しき」としていること、「え見過ぐさで」としている箇所を「思へ見過ぐさで」としていることから、何等かの意図があつての本文であろうということは言える。

一〇七丁ウラ (画三七七三右) (大一一八五)

- 1 ぬる事さらにしられしとおもひつる
- 2 ものをとてかみをふりかけてなけ
- 3 くけはひた、^①むかしみ給しもの、
- 4 けのさまとみへたりあさまし
- 5 くむくつけしとおほししみにしこ
- 6 とのかはらぬもゆ、しければこのわ
- 7 らはのをとらへてひきすへてさ
- 8 まあしくもせさせたまはすまこ
- 9 とにその人かよからぬきつねなど^②いふ

①**定横**榊池陽肖三**阿**

〔参考〕**定大**「か」のむかし」、他諸本「かのむかし」

②ナシ

〔参考〕**阿七**「いふもの」、他諸本「いふなる物の」

一〇八丁オモテ (画三七七三左) (大一一八五〜一一八六)

- 1 なるたふれたるかなき人のおもて
- 2 ふせなる事いひいつるもあな

- 3 　るをたしかなるなのりせよまた
- 4 　人のしらさらむ事の心にしるく^①思
- 5 　いてぬへからむをいえさてなむいさゝか
- 6 　にてもしむすへきとの給へはほろく
- 7 　といたくなきて
- 8 　我身こそあらぬさまなれそれなから
- 9 　そらおほれする君はきみなり

①ナシ

〔参考〕阿御七宮尾平大国「思ひいてられぬへからんこと」、阿阿「おもひいてつへからんこと」、他諸本「思ひいてられぬへからむ」

- 一〇八丁ウラ（画三七四右）（大一一八六）
- 1 　いとつらしくとなきさけふものから
- 2 　さすかに^①ものはちするけはひ^②かな
- 3 　らすなかくいととうとましく心うけ
- 4 　れは^③ものいはせしとおほす^④宮
- 5 　の御事にてもいと^⑤うれしうかた
- 6 　しけなしとなむあまかけり
- 7 　てもみたてまつれと道ことになり
- 8 　ぬれはこのうへまでもふかくお
- 9 　ほえぬにやあらむなをみつからつら

①ナシ

〔参考〕阿保「物はちしらひたる」、他諸本「ものはちしたる」

②ナシ 〔参考〕他諸本「かはらす」

諸本は、「もの恥ぢする気配」を六条御息所の変わらない癖として書く。それに対し、玉里文庫本は、「もの恥ぢする気配」から間違ひなく六条御息所その人の物の怪であると決定している。

③定陽

〔参考〕阿保「物はいはせし」、阿阿「物はいはせし」、他諸本「物はいはせし」

④ナシ 〔参考〕他諸本「中宮」

⑤ナシ 〔参考〕他諸本「うれしく」

- 一〇九丁オモテ（画三七四左）（大一一八六）
- 1 　しとおもひきこえし心の^①ふし
- 2 　なむとまるものなりけるそのなか
- 3 　にも^②いきてよに人よりおとして
- 4 　おほしすてしよりもおもふと
- 5 　ちの御ものかたりのついでに心よか
- 6 　らすにくかりしありさまをの
- 7 　給いてたりしなむいとうらめし
- 8 　くいまはたゝなきにおほしゆる
- 9 　してこと人のいひおとしめむをた

①阿保

「参考」阿「しうしんは」、他諸本「しうなむ」

②河七 「参考」他諸本「いきてのよに」

一〇九丁ウラ (画三七五右) (大一一八六)

- 1 にはふきかくし給へとこそおもへと
- 2 うちおもひしはかりにかくいみしき
- 3 身のけはひなれはかくところせき
- 4 なり①その人をふかくにくしと思
- 5 きこゆる事はなけれとまもり
- 6 つよくいと御あたりとをき心地
- 7 してえちかつきまいらす御こゑ
- 8 をたにほのかになむき、侍よし
- 9 いまは②このつみかるむはかりのわざ

①ナシ 「参考」他諸本「この人」

②定横神池陽肖三河阿保、他諸本「つみの」

一一〇丁オモテ (画三七五左) (大一一八六、一一八七)

- 1 おせさせ給へすほうと経との、し
- 2 る①ことにも身にはくるしくわひ
- 3 しき②ほのおとのみまつはれてさ
- 4 らにたうとき事もきこえねは
- 5 いとかなしくなむ中宮にもこの

6 よしをつたへきこえ給へゆめ^③御

7 宮仕のほとに人ときしろひそね

8 む心つかひ給なさい宮におはし

9 まし、ころほひの御つみかるむへか

①ナシ 「参考」阿「も」、他諸本「事も」

②ナシ

「参考」阿「ほのほに」、他諸本「ほのほのみ」

③定横神池陽肖三河御宮尾平大鳳国阿

「参考」河七「御みやつかひ」、他諸本「宮つかへ」

一一〇丁ウラ (画三七六右) (大一一八七)

- 1 覧功德の事をかならすせさせ
- 2 給へいとくやしきことになむありけ
- 3 るなど①いひつ、くれとももの、け②と
- 4 むかひてものかたりし給はむも
- 5 かたはらいたければ③ふうしこ
- 6 めてうへをはまたことかたにし
- 7 のひてわたしたてまつり給
- 8 かくうせ給にけりといふ事世中に
- 9 みちて御とふらひにきこへ給人くあ

①定陽 「参考」他諸本「いひつ、くれと」

②ナシ 「参考」他諸本「に」

③ 定陽肖

〔参考〕**〔定榊〕**「ふしむ(し)トむト反転ノ符号アリ)こめて」、**〔別阿〕**を
しこめて」、他諸本「ふむしこめて」

一一一丁オモテ(画三七六左)(大一一八七)

- 1 るをいとゆ、しくおほすけふのか
- 2 へさみにいて給ける上達部などかへ
- 3 り給道にかく人の申せはいといみ
- 4 しき事にも^①あるかひあるさい
- 5 はひ人のひかりうしなふひにて
- 6 あめ^②ふるなりけりとうちつけこ
- 7 とし給人も^③ありけりまたかく^④だ
- 8 らひたる人はかならず^⑤えなからへぬ
- 9 事なりなにをさくらにといふふる

① ナシ

〔参考〕**〔河御宮尾平鳳国〕**「あなるかないけるかひありつる」、**〔別保〕**「あ
りけるかないけるかひありつる」、他諸本「あるかないける
かひありつる」

玉里文庫本は、「いみじきことにもある。甲斐ある幸ひ人の」とい
う本文になっている。目移りによる文字数の減少とも考えられる。

② ナシ

〔参考〕**〔定榊〕**「はそへほ」ふるなりけり」、**〔別阿〕**「はふるなりける」、
他諸本「はそほふるなりけり」

③ 別保 「参考」他諸本「あり」

④ ナシ 「参考」他諸本「たらひぬる」

⑤ ナシ

〔参考〕**〔定池〕**「えななか^かぬ」、**〔別保〕**「なか、らぬ」、**〔別阿〕**「かくこ
そはなか、らぬ」、他諸本「えななか、らぬ」

一一二丁ウラ(画三七七右)(大一一八七)

- 1 こともあるはか、る人のいと、よにな
- 2 からへてよのたのし^①みをつくさ
- 3 は^②かたはらのくるしからむいまこそ
- 4 二品宮^③のものと御おほえあらはれ給
- 5 はめいとをしけにおされたりつ
- 6 る御おほえをなとうちさ、めきけ
- 7 り衛門督^④昨日いとくらしかたかり
- 8 しを^⑤おもひいて、けふは御おと
- 9 うと、も左大弁藤宰相などをくの

① ナシ 「参考」他諸本「び」

② ナシ 「参考」他諸本「かたはらの人」

諸本は「かたはらの人」が苦しい」としている本文を、玉里文庫
本は、「かたはら」が苦しい」としている。前者は想像の話であるの
に対し、後者は話者である人物自身の話をしているという違いがあ
る。

③ ナシ 「参考」他諸本「は」

④定横池陽肖三

「参考」**定横**「きのふはいと」、**河保**「きのふは」、他諸本「きのふ」

⑤ナシ

「参考」**定横**「思ひて」、三ナシ、他諸本「思ひて」

一一二丁オモテ (画三七七左) (大一一八七〜一一八八)

- 1 かたにのせてみ給^①けるかくいひあえ
- 2 るをきくにもむねうちつふれて
- 3 なにかうきよにひさしかるへきと
- 4 うちすしひとりちてかの院え
- 5 みなまいり給たしかならぬ事な
- 6 れはゆ、しくやとてた、おほかたの
- 7 御とふらひにまいり給えるにかく人の
- 8 なきさはけはまことなりけりと
- 9 たちさはき給えり式部卿宮も

①ナシ 「参考」他諸本「けり」

諸本では句点で読解するのに対し、玉里文庫本は、読点となる。ただし、玉里文庫本は、連体形で文章を結んでいるとも考えられる。

一一二丁ウラ (画三七八右) (大一一八八)

- 1 わたり給ていといたくおほしほれ
- 2 たるさまにてそいり給^①人^①の御消

3 息^②ともえ申つたえ給はす大将の

- 4 君なみたをのこひてたちいて給え
- 5 るにいかにくゆ、しきさまに人の
- 6 申つれはしむしかたき事にて
- 7 なむた、ひさしき御なやみをう
- 8 け給はりなきてまいりつるな
- 9 との給いとおもくなりて月日へ給え

①定横池陽肖三

「参考」**河保**「人くも」、他諸本「人の」

②河 「参考」他諸本「も」

一一三丁オモテ (画三七八左) (大一一八八)

- 1 るを^①もの、けのしたるになむ
- 2 ありけるやうくいきいて給やうにき
- 3 きなし^②ていまなむみな人心しつむ
- 4 めれとまたいとたのもしけなし
- 5 や心くるしき事にこそとてまこと
- 6 にいたくなき給えるけしきなり
- 7 めもすこしはれたり衛門督我
- 8 あやしき心ならひにやこの君のいと
- 9 さしもしたしからぬま、は、の御事

①ナシ

「参考」他諸本「この暁よりたえいり給へりつるを」

玉里文庫本では、脱文となつてゐる箇所である。「月日へ給えるを」と「たえいり給へりつるを」の「るを」で目移りしたものと考えられる。

②別保 「参考」別阿「給てこそ」、他諸本「侍て」

一一三丁ウラ(画三七九右)(大一一八八～一一八九)

- 1 ①にいたく心しめ給えるかなとめをと、
- 2 むかくこれかれまいり給えるよし
- 3 きこしめしておもきひやうさのに
- 4 はかにとちめつるさまなりつる
- 5 を女房などは心もおさめすみた
- 6 りかはしくさはき侍りけるにみつ
- 7 からもえのとめす心あはた、し
- 8 き程にてなむことさらになむかくも
- 9 のし給えるよろこひはきこゆへき

①定横神池陽首三回

「参考」別阿「により」、他諸本「を」

一一四丁オモテ(画三七九左)(大一一八九)

- 1 との給えりかむの君はむねつふれて
- 2 かゝるをりのらうろうならずはえ

3 まいるましく①はつかしくおもふも

4 心のうちそはらきたなかりける

5 かくいきいて給ての、ちしもおそ

6 ろしく②おほされてまたくいみし

7 き③ほうともつくしてくはへおこな

8 はせ給うつし人にてたにむくつ

9 けかりし人の御けはひのまして

①ナシ 「参考」他諸本「けはひ」

玉里文庫本は、「けはひ」が脱落してゐる箇所である。前の脱落とは違い、意識的な脱落とも考えられる。

②ナシ 「参考」他諸本「おほして」

③ナシ 「参考」他諸本「ほうともを」

一一四丁ウラ(画三八〇右)(大一一八九)

- 1 よかはりあやしきものゝさまに
- 2 なり給えらむおほしやるにいと
- 3 心うければ中宮をあつかひきこへ
- 4 給さえそのをりはものうくいひ
- 5 もてゆけは女の身はみなおなし
- 6 つみふかき④ものといふかしとなへて
- 7 のよの中いとはしくかのまた
- 8 人もきかさりし御なかのむつもの
- 9 かたりにすこしかたりに給えり

①ナシ

〔参考〕**河大**「もちろそかし」、**別阿**「物そかし」、他諸本「もとのそかし」

諸本では「女の身」を罪の基（根本）だとしているのに対し、玉里文庫本では「女の身」は罪深いものだと言うらしいと述べるのみである。

一二五丁オモテ（画三八〇左）（大一一八九）

- 1 し事をいひいてたりしに
- 2 ^①まことくおほしいつるにいとわつらは
- 3 しくおほさる御くしおろして
- 4 むとせちにおほしたれはいむこと
- 5 のちからもやとて御いたゝきしるし
- 6 はかりはさみて^②五六はかりうけさせ
- 7 たてまつり給御かいのしいむこと
- 8 のすくれたるよし仏に申にも
- 9 あはれにたうときことましりて

①ナシ

〔参考〕**定禰**「ま事作」、**別阿**「まことに」、他諸本「まこと」

②ナシ

〔参考〕**定禰**「五戒はかりを」、他諸本「五かい許」

この箇所は不審である。光源氏が紫の上に「在家の信者としての受戒」^{一七}を五、六度受けさせたとは考えづらいことから、書写間違いで

あろうと考えられる。

一二五丁ウラ（画三八一右）（大一一八九、二一九〇）

- 1 人^①わろく御かたはらに^②そひる給て
- 2 ^③なみたを、しのこひ給つ、佛を
- 3 もろ心に念しきこへ給さまよに
- 4 かしこくおはする人もいとかく御心
- 5 まとふことにあたりてはえしつめ
- 6 給はぬわさなりけりいかなるわざ
- 7 をしてこれをすくいかけとゝめ
- 8 たてまつらむとのみよるひるおほ
- 9 しなけくにほれくしきまで

①**定横**神池三 「参考」他諸本「わろく」

②**定横**神池陽肖三河**御**七宮尾平鳳国**別保**

〔参考〕**河大**「そひたまひて」、他諸本「そひあて」

③**定三河**平国 「参考」他諸本「なみた」

一二六丁オモテ（画三八一左）（大一一九〇）

- 1 御かほもすこしおもやせ給にたり
- 2 五月などはましてはれくしからぬ
- 3 そらのけしきに^①さはやき給はね
- 4 とありしよりはすこしよろし

- 5 きさまなりされとなをたえす^②
- 6 わたり給もの、けのつみすくうへき
- 7 わさひことに法華經一ふつ、くやうせ
- 8 させ給ひことになにくれとたうとき
- 9 わさせさせ給御まぐらかみちかく

① 定陽 「参考」他諸本「え」

② ナシ

「参考」 圓禰 「な」やみ、他諸本「なやみ」

玉里文庫本には「なやみ」がない。諸本では「なやみわたり給ふ」となっていることから、悩みが長期に亘っているとわかる。一方、玉里文庫本では、「なを絶えず渡り給ふ」と文章の切れ目が変わることから、光源氏が渡ってきているとしている。

一一六丁ウラ (画三八二右) (六一一九〇)

- 1 ^①てふたむの御と経こゑたうとき
- 2 かきりしてよませ給あらはれそ
- 3 めてはをりくかなしけなる事
- 4 ともをいへとさらに^②もの、けさりは
- 5 てすいと、あつき程は^③いまもさえ
- 6 つ、いよくのみよはり給へはいはむか
- 7 たなく^④のみおほしなけきたり
- 8 なきやうなる御心ちにもかゝる御け
- 9 しきを心くるしくみたてま

① ナシ 「参考」他諸本「ても」

② ナシ 「参考」他諸本「このもの、け」

③ 定陽 「参考」他諸本「いきもたえつ、」

④ ナシ 「参考」他諸本ナシ

一一七丁オモテ (画三八二左) (六一一九〇)

- 1 つり給て世中になくなりなむ
- 2 もわか身にはさらにくちをしき
- 3 ことのこるましけれとかくおほし
- 4 まとふめるにむなしくみなされた
- 5 てまつらむ^①はいと思くまなかるへ
- 6 ければおもひをこして御ゆなとい
- 7 さ、かまいるけにや六月になりて
- 8 そ時く御くしもたけ給けるめつ
- 9 らしくみたてまつり給にも

① 圓禰 「参考」他諸本「か」

一一七丁ウラ (画三八三右) (六一一九〇～一一九二)

- 1 なをいとゆ、しくて六条院には
- 2 あからさまにも^①わたり給はす姫
- 3 宮はあやしかりし事をおほし
- 4 なけししよりやかてれいのさ

- 5 まにもおはせすなやましく
- 6 し給へとおとろくしくはあら
- 7 すたちぬる月よりものきこし
- 8 めさていたくあをみそこなはれ
- 9 給かの人はわりなくおもひあまる

①定禰

〔参考〕定三「へえ」わたり、他諸本「えわたり」

一一八丁オモテ (画三三三左) (大一一九二)

- 1 時くはゆめのやうにみたてまつ
- 2 りけれど^①宮はつきせすわりなき^②御事におほしたり院を^③い
- 3 みしうおちきこへ給える御心に
- 4 ありさまも人の程もひとしく
- 5 たにやはあるいたくよしめきな
- 6 まめきたれはおほかたの人めに
- 7 こそなへての人にはまさりてめ
- 8 てらるれおさなくよりさるたくひ

①定横 榊池陽肖三河別 〔参考〕他諸本「宮」

②ナシ 〔参考〕他諸本「事」

③ナシ 〔参考〕他諸本「いみしく」

- 一一八丁ウラ (画三三四右) (大一一九二)
- 1 なき御ありさまにならひ給え
- 2 る御心には^①めさましうのみみ
- 3 給程にかくなやみわたり給はあ
- 4 はれなる御すくせにそありける
- 5 御めのとたちみたてまつりと
- 6 かめて院のわたらせ給事もいと
- 7 たまさかなるをつふやき^②みたて
- 8 まつるかくなやみ給ときこし
- 9 めしてそわたり給女君はあつく

①定宵 〔参考〕他諸本「めさましく」

②定陽

〔参考〕定横「うらみうらみ」、他諸本「うらみ」

一一九丁オモテ (画三三八四左) (大一一九二)

- 1 むつかしとて御くしすまして
- 2 すこしさはやかにもてなし給えり
- 3 ふしなからうちやり給えりし
- 4 かはとみにもかはかねとつゆはかり
- 5 うちふくみまよう^①すちなくてい
- 6 ときよらにゆらくとしてあをみ
- 7 おとろえ給えるしも色は^②まをに
- 8 しろくうつくしけにすきた

9 るやうにみゆる御はたつきなとよに

①[㊦]陽肖 「参考」他諸本「すちもなくて」

②ナシ

「参考」[㊦]横「さを仕」、[㊦]池「さをさまて」、他諸本「さをに」

諸本では、紫の上の顔色を青白いものとしているが、玉里文庫本では、真つ白なものとしているという違いがある。

一一九丁ウラ (画三八五右) (大一一九一～一一九二)

1 なくらうたけなりもぬけたる

2 むしのからなどのやうにまたいと

3 た、よはしけにおはすとし

4 ころ[㊦]すみはて給はてすこしあ

5 れたりつる院のうちたとしへ

6 なくせはけにさへ[㊦]みゆる昨日今日

7 かくものおほえ給ひまにて心

8 ことにつくろはれたるやりみつ

9 せむさいのうちつけに心ちよけ

①ナシ 「参考」他諸本「すみ給はて」

②[㊦]阿 「参考」他諸本「みゆ」

一二〇丁オモテ (画三八五左) (大一一九二)

1 なるをみいたし給てもあはれ

2 にいまゝてへにけるをおもほすいけ

3 はいとす、しけにてはちすのは

4 なのさきわたれるに葉はいとあ

5 をやかにて露きら／＼と玉のやう

6 にみえわたるを[㊦]あれみ給へおの

7 れひとりもす、しけなるかな

8 との給にをきあかりてみいたし

9 給えるもいとめつらしければかく

①[㊦]陽肖 「参考」[㊦]池「かれ」、他諸本「かれ」

一二〇丁ウラ (画三八六右) (大一一九二)

1 てみたてまつるこそゆめの心

2 ちすれいみしくわか身さへかきり

3 とおほゆるおり／＼のありしはや

4 となみたをうけての給へはみつ

5 からもあはれにおほして

6 きえとまるほとやは[㊦]あるとたまさかに

7 はちすのつゆのかゝるはかりを

8 とのたまふ

9 ちきりおかむこのよならでもはちすはに

①ナシ 「参考」諸本「ふへき」

諸本は「蓮にかかる露が消えずに残っている間だけでも生きていら

れるでしようか」と訳せる^{一八}。「生きていられるでしようか」の箇所
が「経べき」となるわけだが、玉里文庫本ではこの箇所が「あると」
となっている。この世に「ある」と捉えることができるため、大きな
解釈の違いはないといえる。

なお、今回は本文の各異同の考察に大幅に紙幅を割いたため、八一
〜二〇丁全体の考察は次稿に回す。

【補記】

・ 本稿は、JSPS科研費21K00319の助成を受けたものである。
・ 本稿を執筆するにあたり、翻刻は次のように分担した。

- 八一〜二〇丁 武藤 那賀子
- 一〇一〜二〇丁 富澤 萌未

なお、異同の確認および考察は右記の二名で行なった。

注

- 一 鹿児島大学附属図書館の玉里文庫には、『源氏物語』が二セットある。本稿で扱うのは、一五帖のみのもので箱に「古筆源氏物語」とあるものである。
- 二 徳光澄雄「鹿児島大学附属図書館蔵 玉里文庫本古筆源氏物語について」『語文研究』二三号、一九六七年四月
- 三 『源氏物語』原本データベース (二〇二二年二月一日一六時〇〇分閲覧) http://base1.nijl.ac.jp/view/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KT&C_CODE=0091-027603&IMG_SIZE=&PROC_TYPE=&SHOMEI=%E3%80%90%E6%BA%90%E6%B0%8F%E7%89%A9%E8%AA%9E%E3%80%91&REQUEST_MARK=&OWNER=&BID=&IMG_NO=1
- 四 武藤那賀子「玉里文庫本古筆源氏物語(鹿児島大学附属図書館蔵)再考(一)」「国際文化学部論集」第一九巻二号、二〇一八年一〇月 および「玉里文庫本古筆源氏物語(鹿児島大学附属図書館蔵)再考(二)」「国際文化学部論集」第一九巻二号、

二〇一八年二月)。

- 五 一〜四〇丁、および四一〜八〇丁の考察については、武藤那賀子・富澤萌未「玉里文庫本『古筆源氏物語』「若菜下」巻・第一〜四〇丁の翻刻と考察」(『国際文化学部論集』第二三巻三号、二〇二二年二月)、武藤那賀子・富澤萌未「玉里文庫本『古筆源氏物語』「若菜下」巻・第四一〜八〇丁の翻刻と考察」(『国際文化学部論集』第二三巻四号、二〇二二年三月)に掲載してある。

六 徳光澄雄(前掲論文)は、「若菜下」巻を定家本系本文としている。

七 池田亀鑑『源氏物語大成』中央公論社、一九八四年

八 異同の確認には、池田亀鑑『源氏物語大成』(前掲書)を使用した。また、諸本を示す漢字一字もこれに従った。

九 『日本国語大辞典』第二版

一〇 なお、この箇所については、鹿児島大学附属図書館で現物を見て確認しようとした。しかし、当館のサイト (<https://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/collection/about>、二〇二二年二月一日二〇時閲覧) には、「原則として原本の閲覧は認めません。」とあり、実現しなかった。

一一 『新編日本古典文学全集』(小学館)の現代語訳に依った。

一二 『新編日本古典文学全集』(小学館)の現代語訳に依った。

一三 「いとほし」の訳については、陣野英則『源氏物語』「総角」巻の「いとほし」——困惑しあう人々——(『国文学研究』一六二巻、二〇一〇年一〇月)、および陣野英則『源氏物語』の「いとほし」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三分冊)巻五六、二〇一一年二月)が非常に参考になる。

一四 『日本国語大辞典』第二版

一五 『日本国語大辞典』第二版

一六 『新編日本古典文学全集』(小学館)

一七 『新編日本古典文学全集』(小学館)の注釈に依った。

一八 『新編日本古典文学全集』(小学館)の現代語訳に依った。